

スヌーズレンの研修会及びスヌーズレン環境に関する調査

○藤澤 憲 (和歌山県立和歌山さくら支援学校) 姉崎 弘 (常葉大学教育学部) 桃井 克将 (徳島文理大学保健福祉学部) 高橋 眞琴 (鳴門教育大学大学院)
KEY WORDS : スヌーズレン研修、スヌーズレン環境、アンケート調査

I. 問題と目的

我が国では、これまでスヌーズレンの教育・セラピーに関する論文が比較的少ない(姉崎, 2013)。また、スヌーズレンの基本的な考え方や理念から離れて、スヌーズレンが自己流に解釈され、実践されていることが少なからずあるのではないかと推測される(姉崎・藤澤, 2017)。これらの現状を踏まえ、筆者達の所属団体であるISNA日本スヌーズレン総合研究所は、過去2年間において、計7回の研修会を通して、スヌーズレンの歴史や基本概念の伝達、さらに実践研究及び実践報告等を行ってきた。今回、研修会の参加者を対象に、研修機会の状況とスヌーズレンルームの設置状況及びルームの環境調整等についての調査を実施したので、それらの結果を報告し、今後の課題について言及することを目的とした。

II. 方法

2015年8月～2017年2月に大阪、東京で行われたISNA日本スヌーズレン総合研究所主催のスヌーズレン研修会(計7回のうち、アンケート対象は5回)への参加者、計121名(教育関係67名、福祉・医療関係51名、その他3名)を対象にスヌーズレン研修会及びスヌーズレン環境に関するアンケート調査(選択マーク式と一部記述式)を実施した。各々の質問に対する集計結果を以下に記す。また、職場にスヌーズレンルームが有る参加者に対して「手作りルームか、既成ルームなのか」を尋ね、「器材等の配置換えの状況」を調査した。その際に、回答方法を「毎回配置換えをする(3点)」「たまに配置換えをする(2点)」「ほとんど配置換えをしてない(1点)」の三択とし、一元配置分散分析を実施した。

III. 結果

【研修会について】

1. 「過去のスヌーズレン研修会への参加有無」

参加者の72%(121名中87名)がスヌーズレン研修会に初めて参加した。また、参加者の28%(121人中34名)が過去にスヌーズレンの研修会への参加経験があったが、そのうち21人が、過去に1回のみ参加経験であった。

2. 「過去のスヌーズレンの実践や研究の経験有無」

参加者121名中、これまでスヌーズレン実践経験有りが55名、無しが66名であった。実践経験無しの73%(66人中48名)の参加者が「今後スヌーズレンに携わりたい」と回答し、「携わりたくない」と回答した参加者はいなかった。

3. 「今後の研修会等の要望(自由記述)」

「実際のスヌーズレンルームで実技を学びたい」「スヌーズレンが教育やセラピーに活用されていることを知り、もっと実践における具体的な成果を知りたい」「脳科学について学びたい」「手軽なスヌーズレングッズの紹介をしてほしい」「関西地域だけでなく、東日本地域でも研修会を開催してほしい」等の要望が多かった。

【スヌーズレンルームについて】

4. 「職場におけるスヌーズレンルームの設置有無」

研修会参加者121名中、職場にスヌーズレンルーム有りが52名(教育関係30名、福祉・医療関係22名)であった。

5. 「手作りのルームか、既成のルームなのか」

職場にスヌーズレンルーム有りが52名のうち、手作りルーム28名(教育関係者21名、医療・福祉関係者7名)、既成ル

ームが24名(教育関係者9名、医療・福祉関係者15名)であった。

6. 「器材等の配置換えの状況」

Table. 1 4つのルームのグループにおける分散分析の結果

ルームのグループ	平均値	標準偏差	F
(教育) 手作りルーム	2.33	.856	19.8*
(教育) 既成ルーム	1.00	.000	
(医・福) 手作りルーム	1.71	.488	
(医・福) 既成ルーム	1.00	.000	

(N7～21)

* $p < .05$

職場に既成ルームが設置されている教育関係者及び医療・福祉関係者全員が、「ほとんど配置換えをしていない」の回答であった。教育関係者の手作りルーム、教育関係者の既成ルーム、医療・福祉関係者の手作りルーム、医療・福祉関係者の既成ルームの器材等の配置換えの状況を比較するために分散分析を行った。その結果、 $F(3, 48) = 19.8, p < .05$ となり、ルームの主効果が認められた。TukeyのHSD法による多重比較の結果、教育関係者の手作りルームの得点は教育関係者の既成ルーム及び医療・福祉関係者の既成ルームに対し、有意に高いことが認められた($p < .05$)。また、医療・福祉関係者の手作りルームの得点は医療・福祉関係者の既成ルームに対し、有意に高いことが認められた($p < .05$)。

7. 「どんな器材が設置されているのか」

職場にスヌーズレンルーム有りの52名のうち、手作りルームでもスヌーズレンの代表的な器材と手作りのグッズを併用して使用する場合が多く見られた。多い順にバブルチューブが75%(52名中39名)、サイドグロー67%(52名中35名)、ソーラー・プロジェクター58%(52名中30名)、ビーズクッション27%(52名中14名)であった。

IV. 考察

研修会については、過去の全てのスヌーズレンに関する研修会も含めて、初めての参加者が72%(1回以下の参加者も含めると89%)と多かった。これは、参加者の「今後の研修会等の要望」の記述からも読みとれるように、これからスヌーズレンについて学んでいきたいと考えていた参加者が多かったと考えられる。スヌーズレンルームについては、研修会参加者全体を通じて、既成ルームで実践をしている人に比べて、手作りルームを設置して実践をしている人の方が、スヌーズレン環境の配置替えを行う傾向にあることが示唆された。これは、既成ルームでは、スヌーズレンの比較的大型で代表的な器材が中心となるために、実践者が予め設置された条件の下で使用しようとする機会が多いのではないかと考えられる。一方で、手作りルームでは、代表的な器材がなくても、同様の効果のある安価で比較的小型な器材を見つけて安全に使用できるように工夫する機会が多くなり、その結果、スヌーズレン環境の配置替えに気を配り、利用者一人一人のニーズに合わせた取組がより可能になるからではないかと考えられる。課題として、代表的な器材の活用方法の見直しや教育・セラピーにおける実践の集積とそれらの伝達・共有が急務であると考えられる。

(FUJISAWA Ken, ANEZAKI Hiroshi, MOMOI Katsumasa, TAKAHASHI Makoto)